

一人ひとりの笑顔のために～特別支援教育にできること～

丹波市立氷上中学校

教諭 木寺 秀美

1 取組の内容・方法

平成19年度から特別支援教育が全国でスタートした。今年度で13年になる。この間に、兵庫県内でも子どもを中心に据えた支援体制づくりが進み、着実な支援の広がりが感じられるようになってきた。

私が特別支援教育に携わったのも平成19年度からで、同じく13年が過ぎようとしている。私が特別支援学級の担任として、また、丹波市の中学校通級指導教室の担当として現在まで関わってきた子どもたちとの授業実践や小中高の連携のあり方などについて、以下にまとめる。

(1) 安心できる、自信をつける場

通級指導教室や特別支援学級には、さまざまな発達上の課題をもつ子どもたちがやってくる。困っていることや不安を抱えている、失敗や叱責により自信を失っている、うまく友だちと関われないなど、学校生活や学習での課題をもっている生徒も多い。中には、自傷行為が止められない、自分を否定的にしか評価できない、と訴える子どもを何とか支えたいというようなスタートでもあった。

特別支援教育の教室では、まず子どもたちが安定した気持ちで学校生活を送れることをサポートする。そのためにも、自分を分かってもらえる人（キーパーソン）の存在、何でも言えて安心できる環境づくりは不可欠である。じっくりと悩みを相談する、不安をへらす方法を一緒に考える、苦手なことを一緒にやってみる、学校生活や学習の見通しを持たせるなど、一人ひとりの指導内容は異なるが、支援者との信頼関係を築きながら子どもたちは安心感が持てるようになっていく。「やってみようかな」という力が少しずつ湧いてくる。プラスの体験によって「私もまあまあイケてる」と思える。「やればできるんだ」と自信を取り戻す。自分の中に満足感や達成感のような心地よい感情が持てれば、子どもたちは変わっていく。こういうポジティブな意識を育てるのが、この教室に関わる教師の醍醐味だと思う。

目の前にある「今」の課題を解決することは大切である。しかし、その指導や支援がその場限りのものになってしまっていないだろうか。そうならないためにも、子ども自身の「自己理解を深める」ことが支援のカギとなってくると考えている。自分に合ったやり方を見つけることや自分の得意や強みを生かすことは、子どもたちの「今」を支えるだけでなく、「将来」にも生きる支援となる。些細なことかもしれないが、ノートに10回書いても頭に入らないがカードにすると覚えられた、YouTubeの動画を見て古文の暗唱テストをクリアした、掃除当番を熱心にやっているねと先生に褒められた、手芸が好きだから高校でも専門的に学んでみたい、写真が趣味だからみんなが喜ぶような写真を撮ろう等といったプラスの体験や思考が、まさに彼らの「将来」にも生かされている。

(2) つまづきに寄り添う

「私たちの教え方で学べない子には、その子の学び方で教えよう」という上野一彦先生の言葉がある。たいへん共感できる言葉だ。子どもは興味がなければやらない。工夫や改善をするのは教師の側である。「できない子」と決めつけるのではなく、子どもに合った教え方ができる教師になりたい。子どもの学びを支える教師でありたいと思う。

学習でのつまづきは大きな課題の一つである。子どもたちには「勉強が分かるようになりたい」という気持ちがある。教科学習についても、困難やこだわりがどこにあるかという丁寧なアセスメントが必要である。作文をどのように書いたらいいかわからない、出来事や経験したことが想起しにくい、聞き漏らしたり聞いたことを忘れてりする、書くことで精一杯になり内容が理解できない、図形や記号の形どりが難しい、など子どもたちのつまづきの背景や要因は実にさまざまであった。「みんなと同じ」は難しくても、自分に合った手段や方法を使うことで「こうすればいいのか」「わかった」「苦痛がへった」「一人でもできた」という学びの支援ができるのではないだろうか。

通級指導教室では、タブレットPCなどを用いて個別指導を行っている。機器を使うことで、困難を取り除いたり減らしたりすることができる。実際、カメラ機能、インターネット検索、筆順や計算のアプリ、ビジョントレーニングなど、ICTを学びの支援の一つとして活用することで、子どもたちの学習への負担感は軽減しているようだ。同時に「またタブレットで学習したい」という意欲も感じられた。丹波市の中学校現場では、環境の整備やルール作り、教師側の研修など、集団場面での学習への導入には課題がまだ残っている。しかし、目的を明確にして活用すれば、自分に合った方法での学習ができるなど、今後もいろいろな可能性が広がっていくだろう。

(3) 進路 つなぐ、つながる

中学校の3年間は短い。保護者と面談をすると、次のような声を聞くことがある。

- ・高校に進学した時に、「人間関係がうまくいくか」「学習についていけるか」「小中学校との違いに対応できるか」が不安である。
- ・ソーシャルスキルの教室に行っても、待合室での中学生の保護者の話題は、高校のことばかり。将来がだんだん不安になってきている。
- ・普通高校で対応していけるのか？我が子は『高校』という進路を選択してもいいのか？

小学校から中学校、また、学級担任が変わるたびに、一から子どもの状況を説明してきた。理解してもらえるかどうかという不安な気持ちになることもあった。そんな保護者の負担が少しでも軽減できるツールとして、「サポートファイル」（個別の教育支援計画）や「中学校・高等学校連携シート」を活用することは有効である。

サポートファイルは、平成21年度から活用が開始された。サポートファイルには、子どもの特徴や日常生活におけるかかわり方、医療機関や相談機関での記録、学校等での支援計画などがつづられている。学習や生活をしていく上で、一貫した支援が受けられ支援者に適切に理解してもらうために役立てられている。共通理解が進む、必要な支援が途切れることなく引き継がれるというメリットがある。

サポートファイルを持たない生徒に対して、中学校・高等学校連携シートが平成23年

度から運用されるようになった。通級指導の対象となる子どもたち、通常学級に在籍している支援を要する子どもたちも、サポートファイルに準じる形で、「主体的な」支援の引き継ぎができるようになってきた。

- ・中学校での様子を具体的に伝えることができた。ただ手渡すだけでなく、引き継ぎ会を設定しなければならないことで、情報を伝えられやすい。
- ・高校側も支援や配慮のための準備ができるので、好意的受け取ってもらえた。「高校でどんなサポートができるのか？」という姿勢で臨んでもらえたのでありがたかった。
- ・高校でも校内研修をしていただき、入学にあたって全職員で受け入れてくださることが保護者にも通じ、安心して入学を迎えられた。

実際に引き継ぎを行った教師の声である。中学校卒業まで蓄積してきた支援の手がかりを、顔を合わせてつないでいく機会ができたことは何よりも心強かった。

引き継ぎを行った生徒については、高校の校内委員会で共通理解を図り、高校でどんな支援や配慮が必要かを検討されたそうだ。ファイル（シート）があることによって、教師側も意識して生徒の状況について研修会などで情報交流や実態把握を進めていると伺い、支援を「つなぐ」こと、校種間を越えて支援者が「つながる」ことの大切さを実感した。

写真 サポートファイル



2 取組の成果

(1) 丹波市における通級指導

平成22年度に、丹波市の中学校に初めて通級指導教室が設置された。当時、小学校ではすでに通級による指導が軌道に乗り、「中学校でも継続できればいいのに」という声を引き継ぎの中で聞いていた。中学校には「通級による指導」という“文化”はなかったが、その立ち上げに私自身が携わることとなる。小学校の先生方から、教室の運営や指導法について一つ一つ教えていただきながら、巡回指導のシステムを作り、手探りで実践を重ねていった。各中学校の校内委員会などにも参加させていただき、支援を必要とする生徒の情報交流や具体的な支援について相談を行った。丹波市の通級指導担当者会（小学校・中学校・市教委・特別支援学校）も定例化され、他市と合同の研修会なども行われるようになった。このような7年間の取組を通して、中学校でも少しずつ「通級」が周知され、ニーズも着実に増えてきた。今では、丹波市の各中学校に通級指導教室が設置され、2人の学校生活支援教員が巡回による指導を行っている。支援のすそ野が広がり、バトンが今後もつながっていくことが期待される。

(2) 支援の引き継ぎ

現任校でも、特別支援教育コーディネーターを中心として、小学校との連携が図られ

ている。特別支援学級に在籍する児童と保護者が中学校の授業を見学に来る、中学校の担当者が各小学校の児童の実態把握や担任との教育相談を行うなど、学校間での実際の交流の機会も多い。

さらに、今年度の夏の地域交流会では、主に小学校の保護者を対象に、中学校の様子や卒業後の進路について具体的に伝えたり個別に相談を受けたりする機会が設けられた。小学校の保護者の悩みや質問を直接伺うことができ、貴重な機会となった。中学校生活や進路に対する不安など、小学校の先生とも相談することはあるが、このような形で中学校が関わっていくことも、保護者や本人にとって意義のあることだと感じる。

サポートファイル、中学校・高等学校連携シートによる支援の引き継ぎも継続して行われている。学年の会議で引き継ぎの必要な生徒について相談をし、積極的に連携シートも作成していただいた。子どもの実態や課題、支援の目標や内容、合理的配慮などについて引き継ぎをするが、書面だけではなく支援者や保護者が顔を合わせて話せる機会が持てるようになったことは大きい。口頭では、シートに書ききれない事例などについてエピソードを交えながら伝えるようにしている。今年度の小学校との引き継ぎでも、保護者の思いや願いを多く伺うことができた。また、保護者以外に本人が引き継ぎに参加したという例があった。本人に直接思いなどを聞くことができ、とても効果的だと感じた。

3 課題及び今後の取組の方向

ある母親から次のようなメールをいただいたことがある。「高校に行くとはやはり、現状は厳しいです。友達はでき、クラブも頑張っているのですが、授業や生活は、自分から進んでの部分がが多く、抜け落ちていることが多いです」やはり、高校生活でもつまずきがあり、あの子は困っているのだろうという姿が浮かんだ。送り出した側は常に「どうしているかな、うまくいっているのかな」と思いながらも、実際にはなかなかアクションを起こせない。高校から「進路変更をしました」「中途退学しました」などという連絡をいただくこともあった。これが少しでも「早期連絡」や「相談」に変わっていけばと感じていた。平成30年度から高校での通級指導が始まり、特別支援教育が具体的に進められている。今後、特別支援教育の充実や中高連携がさらに進むことが望まれる。

特別支援教育に携わるには、専門性を高める必要があるといわれる。ただし、専門性がなくても、どこに相談したらよいか分かるだけで心強い。初めて特別支援学級の担任をすると分からないことが数多くあり、私自身も悩んだ経験があった。一人で抱え込まずにあの人に聞いてみようと思いきや気軽に相談できる窓口になっていきたいと思う。また、特別支援教育コーディネーター、校内委員会などを活用し、チームで相談し関わっていくことが今後も大切である。

私が通級指導を始めた年の研修会で「あせらずじっくり長く携わりましょう」と講師の先生から声をかけていただいたことが、今でも心に残っている。私は、子どもたちや保護者との出会いから、多くのことを考えさせられ学ぶことができた。子どもたちに寄り添って、子どもたちの世界に入り込む中から見えてくる課題も多くある。一人ひとりの笑顔のために、これからもその一つ一つに真摯に丁寧に向き合っていきたい。